

長野県の埋蔵文化財情報誌



南大原遺跡出土勾玉

信州の遺跡

第24号

県内最新調査成果①

河原石でつくった石室

松本市 やすづか 安塚古墳群

松本盆地の西側、北アルプスをおおぎみる梓川右岸の新村地籍とその周辺には、7世紀～8世紀に造られた安塚古墳群と秋葉原古墳群が分布する。

安塚古墳群は、一般国道158号(松本波田道路)改築に伴い令和4(2022)年度から調査を開始した。これまでに松本市教育委員会の試掘調査や県埋文センターの確認調査により、事業地内には少なくとも5基の古墳が存在することが分かっている。今年度は、そのうちの1基(第13号古墳)を調査した。



この第13号古墳は、横穴式石室の側壁と奥壁の石が検出されたが、墳丘と周溝、天井石は確認されていない。石室は、長さ(開口部から奥壁)3.3m、幅(側壁間)0.9～1.1mを測る。側壁の石積みは奥壁側で4段残り、奥壁は高さ0.6mの扁平な石が3個立ち並ぶ。いずれも梓川から運んできたと考えられる加工しない河原石である。側壁は両側とも直線的に伸びる無袖形で、石室内は立柱石を挟んで2室に分かれている。土器等の副葬品は確認できなかったが、隣接する古墳検出面から出土した土器から、本古墳は8世紀と推測される。なお、奥側の石室底面からは骨片が確認された。



第13号古墳全景

また、側壁は河原石を積んでいるため、石の接する箇所がわずかであった。しかし、解体時の観察で、石の間に土を入れ込み、垂直に積む工夫がされていることがわかった。

過去の調査を基とした先行研究では、安塚古墳群には大小2種類の古墳が存在すると指摘されており、事業地内もこれと同じ様相を示していると考えられる。なお、今回調査した第13号古墳は小さい方にあたる。

事業地は、遺跡範囲内の南端に位置する。今後、事業地内での古墳の分布や古墳個別の構造を把握するとともに、過去の調査事例との比較で古墳の評価ができるものと思われる。(河西克造)



解体で側壁の石を外した状況(左側は立柱石)

発見された平安時代のムラ 塩尻市 内畑遺跡

うちばたけ

塩尻市 内畑遺跡

内畑遺跡は、塩尻市内を北に向かって流下する田川と奈良井川の2つの河川にはさまれた低い平地に位置する。本遺跡から900mほど北には、奈良～平安時代にかけての266軒もの竪穴建物跡や2基の墓など多くの遺構・遺物が見つかり、この地域の開発において中心的な役割を果たした集落と考えられている吉田川西遺跡が、西方約1kmの位置には、平安時代の103軒の竪穴建物跡と3棟の掘立柱建物跡が発見された吉田向井遺跡が存在する。

内畑遺跡については、これまで存在こそ知られていたものの、平安時代の遺物がわずかに採集されている程度で性格や範囲などの実態は不明な遺跡として認識されてきた。今回、市道の拡幅改良工事に伴い初めて本格的な発掘調査を実施し、平安時代の竪穴建物跡4軒と井戸状遺構2基が検出された。

最大幅5mという限られた範囲での調査にあって、建物跡については4軒中2軒で全体像を捉えることができた。いずれの建物跡も河川の氾濫や木の根による影響を受けており、覆土は10cm程度、遺存状況も良好とは言い難い状態であったが、出土遺物から1軒が平安時代初頭に属する建物跡、3軒が9世紀後半～10世紀前半にかけての建物跡と確認することができた。

また、井戸状遺構については2基が隣接する状態で見つかった。1号井戸状遺構は直径約3m、深さ1.5mを測る。2号井戸状遺構はそこから北東方向、遺構中央間の距離にして8mほどの場所に位置し、直径約4.4m、深さ1.8mを測る。ともに播鉢状を呈し、覆土からは平安時代の遺物がわずかに出土している。なお、「井戸状遺構」としたが井戸であったことを示す明確な痕跡は確認できなかった。出土遺物が本遺構と有機的な関係があると判断し得るかを含め、本遺構の時期や性格については今後の検討課題である。

今回の調査では、少なくとも平安時代の前半期において一定期間にわたりこの地で集落が営まれていたことが明らかとなった。前述の2遺跡との関連性にも注目しながら、これからの整理作業に取り組んでいきたい。

(平出博物館 牧野 令)



平安時代の竪穴建物跡



2号井戸状遺構

国史跡 龍岡城跡の堀底確認調査から

佐久市 龍岡城跡

龍岡城は星形稜堡（五稜郭）を呈する城郭であり、国内に函館と佐久にしかない城郭であることから、昭和9（1934）年に国の史跡に指定された。

佐久市では令和3（2021）年に「史跡龍岡城跡整備基本計画」を策定し整備事業を開始した。まず城郭全体の石垣カルテ作成に着手し、カルテ作成の為に堀堆積土の浚渫を行う事となった。浚渫には史跡の保護層30cmを確保するために築城時の堀底確認が必要となり、今回13ヶ所のトレンチによる堀底確認調査を行った。

その結果、堀の堆積土は20～60cmで、堀底と考えられる部分は黄色と白色の混合粘土が貼られた状態で検出された。この粘土層は堀中央部から城内・外石垣それぞれに向けて盛り上がるように確認された。この形態が築城時のものかわからないが一つの特徴と捉えている。この粘土層のレベルは各トレンチにおいてほぼ一定（標高722m）で、堀底は水平に構築されたと考えられる。よって、龍岡城堀の深さは石垣天端より2.3～2.5mであることが明らかとなった。

さらに今回の調査のもう一つの新知見として、城石垣に書かれた朱文字について報告したい。令和4（2022）年度の堀浚渫工事の折、城内側の石垣に朱文字が書かれていることが発見された。書かれている場所はいずれも城内側石垣の天端より1段目と2段目に見られ、大手橋左側周辺に集中する。数は把握したもので約100ヶ所にのぼり、文字は漢字・漢数字・記号等で、文字は石垣の天地に対して正位のものがほとんど無い。このことは石垣が積まれる前に書かれたものである可能性が高いことを示している。今後は城の石垣全体におけるこのような文字の現状把握と、それが築城時のものか、あるいは後世のものかの解明、また顔料分析も含め調査課題としていきたい。

最後に、城郭の整備はあらゆる分野の学際・技術の総合力が必要である。その中であって発掘調査は重要な要素

の一つであり保存整備計画には欠かせない。しかし、龍岡城築城160年という考古学的にはあまりにも短い経過期間が調査を難しくしている部分も今回体感した。今後も遺構判断の困難さを乗り越えて、保存整備に有益な情報を提示できるよう調査を進めていきたい。

（佐久市教育委員会 富沢一明）



調査トレンチ全景（奥が城内、黄色に見える部分が粘土層）



発見された朱文字

遺跡の軌跡

発掘調査の
あゆみ

ナウマンゾウの狩り場の遺跡

信濃町 たてはな 立が鼻遺跡



野尻湖はおよそ7万年前に黒姫火山の崩壊によりせき止められてできた長野県で2番目の広さをもつ湖で、西岸の立が鼻という岬の南側の湖底が立が鼻遺跡の主な範囲である。昭和23(1948)年に湖畔の旅館の主人が干上がった湖底でナウマンゾウの臼歯化石を発見し、この化石が含まれる地層を確かめるために研究者や学生ら約70名によって昭和37(1962)年に発掘が始まり、昭和39(1964)年の第3次発掘で石器が出土したことにより旧石器時代の遺跡と認識された。旧石器時代の生業は専ら狩猟であったと考えられるが、日本列島では火山灰を含んだ酸性の土壤に覆われているため土中の骨は残りにくく、遺物と狩猟対象動物の骨化石が共伴することは極めて稀である。よって大量の動物の骨化石が出土する立が鼻遺跡は特別な遺跡なのである。

野尻湖の水は計画的に水力発電に利用されていて、毎年3月に1年で最も水位が下がり、岸に近い湖底が干上がる。野尻湖発掘調査団はこの時期に定期的に湖底での発掘調査を実施しており、令和7(2025)年3月15日~25日(準備と片付けを含む)には第24次発掘を予定している。発掘は当初から研究者と一般市民とが共同で進める形で60年以上続いていて、23次発掘までにのべ22,310人が参加している。

これまでの研究により、ここは当時も湖底や波打ち際であり、石器のほかに、ナタのような形の骨製クリーヴァーや動物の皮をはぐ際などに用いた骨製スクレイパーなどナウマンゾウの骨を素材とした骨器が出土している。およそ4.4万年前の地層で骨化石が散らばっている中に骨器や割れた骨片の接合資料がみつかったことなどから、ここをナウマンゾウの解体や骨器製作の場所と推定した。調査団はこうしたことなどを総合して、立が鼻遺跡はナウマンゾウのキルサイト(狩猟解体場遺跡)と考えている。しかし遺跡の年代が日本列島にホモ・サピエンスが到達したとされる約3.8万年前よりも古いことなどからこうした考えには議論もあり、課題も多い。これらの課題解決に少しでもつながる発見を今後の発掘に期待している。なお、出土した化石や遺物は、野尻湖ナウマンゾウ博物館に展示されているのでご覧いただきたい。(野尻湖発掘調査団 野尻湖人類考古グループ 渡辺哲也)



発掘のようす (第23次発掘 令和5(2023)年)



骨製クリーヴァー(左)の出土状況 (第10次発掘 昭和62(1987)年)

史跡整備の
あゆみ

大室古墳群の保存整備

長野市 おおむろ 大室古墳群



大室古墳群は長野市南東部の松代町大室ほかに所在する。長野盆地を貫いて北流する千曲川の右岸、東部山地の奇妙山^{きみょうざん}より派生する3つの尾根（北山・霞城・金井山）とその間の2つの谷（大室谷・北谷）に、500余基の古墳が分布している。このうち、約8割にあたる400基が積石墳丘を持つとされ、日本列島最大規模の積石塚古墳群として知られている。また、明治大学の継続調査により古墳群の形成が5世紀代に遡ることが明らかとなり、当該期に朝鮮半島を経由して導入された馬事文化に関わる渡来系集団の奥津城^{おくつき}と考えられている。こうした特徴から平成9（1997）年7月28日に史跡指定された。

史跡整備は指定面積約16.3ha、指定古墳166基をエントランスゾーン・施設整備ゾーン・自然散策ゾーン・歴史景観保全ゾーン・遺構復元整備ゾーン・山林修景ゾーン・眺望ゾーンの7つにゾーニングし、4期の整備が計画されている。第Ⅰ期整備は平成10（1998）

～平成27（2015）年度にかけてエントランスゾーン・施設整備ゾーンを対象に実施された。史跡入口部のエントランスゾーンは、施設整備ゾーンの「大室古墳館」とともに来訪者が最初に訪れる古墳群のガイダンスエリアとして、ゾーン内の古墳すべてを対象に、古墳の縦横断面や、横穴式石室を上から、横から、盗掘抗からと、様々な視点で観察できるように整備を行っている。

第Ⅱ期整備は平成28（2016）年度から大室古墳群の特徴である積石塚と合掌形石室が集中する遺構復元整備ゾーンを対象に実施している。エントランスゾーン・施設整備ゾーンが古墳に親しみを持って学習する場であるのに対して、遺構復元整備ゾーンは学術的調査・研究の場と位置付けられ、合掌形石室を埋葬施設とする積石塚古墳5基と横穴式石室を埋葬施設とする古墳5基を対象に整備が進められている。第Ⅱ期整備完了後は、引き続き第Ⅲ期（自然散策ゾーン・歴史景観保全ゾーン）、第Ⅳ期（山林修景ゾーン・眺望ゾーン）の整備を実施する計画となっている。

（長野市埋蔵文化財センター 風間栄一）



エントランスゾーン整備実施状況（平成26（2014）年4月撮影）



遺構復元整備ゾーン172号墳整備状況（令和6（2024）年度実施）



くだたま 管玉をつくる

中野市 みなみおほら
南大原遺跡



施溝痕の残る碧玉片（上段・中段左）、玉鋸（中段右）、管玉（下段）

中野市上今井遊水地整備事業にともなう南大原遺跡の発掘調査で、いまから約2,000年前の弥生時代中期後半の玉づくり工房跡が見つかった。

青黒く輝く碧玉の管玉は、この地に北陸地方から持ち込まれた良質の原石をもちい、玉鋸で溝を入れ直方体に割り取った素材からつくられた。製作途中の素材となる剥片には、施溝痕、研磨痕が残り、玉づくりの工程をうかがい知ることができる。

極細の管玉たちは、弥生時代中期の北陸地方のブランド品である。シャーペンの芯ほどの玉錐をもちい、両端から孔を開ける匠の技は、誰もが真似のできるものではない。玉づくりに卓越した技術者集団が、北陸西部や越後の地から山を越えてやって来て移住したのか。はたまた、定期的に

やって来て、メンテナンスをしてくれたのか。そのあたりの状況については、取り上げてきた建物跡（工房跡）の埋土をふるいにかけて微細な遺物を取り出し、分析することによって明らかになるであろう。（黒岩 隆）

あしかなもの 武家屋敷推定地でみつけた足金物

長野市 ながぬま
長沼城跡

長沼城跡は、千曲川左岸の自然堤防上に位置する中世～近世の平城である。令和3（2021）年度に発掘調査を開始して以降、様々な遺構や遺物が発見されている。調査4年目となる今年、城跡に隣接した武家屋敷と想定されている地点で、足金物と呼ばれる刀装具が出土した。

足金物とは、太刀を腰から吊るすための金具である。太刀の鞘に足金物を二つ取り付け、さらに帯取という金具を介して紐を通す。本来は二点で一对となるものだが、今回見つかったのは一点のみであった。青銅製で、表面には黒漆が塗布されている。さらにその上に鍍金が施されていた可能性もあるため、今後さらに詳しい解析が必要となる。



出土した足金物

長沼城跡の過去の調査では、甲冑を構成する板状の鉄製品（小札）も出土している。小札には朱の漆が塗布されているものもあり、かつては見事な赤い甲冑だったことが窺える。一体どんな人物が、これらの武具を使用していたのだろうか。想像してみるのも面白いかもしれない。

（伊藤 愛）

真光寺遺跡の古墳（SM02）の横穴式石室入り口付近から、大きな甕がバラバラに割れた状態で見つかった。元の形に復元したところ高さは約1.1m、口縁の直径は約0.6m、最も太くなる胴の部分は直径約1.0mであった。胴部には焼成後にあいた小さな穴がいくつかあるが、どの穴も甕の内側に向かって剥がれるように割れていることから、人が何らかの力を加えて意図を持って割ったものであることがわかる。こうした大甕が古墳の墳丘上か石室入口で出土する例は全国的に見られ、それらの大甕は古墳の周辺で行われた葬送に関する何らかの儀礼や祭祀で使われたものと捉えられることが多い。

同古墳の石室からは、7世紀後半から8世紀初頭につくられた須恵器の蓋や坏、土師器坏なども出土しており、本資料はその時代以降に位置付くと推測する。松本平における飛鳥から奈良への時代の変り目の古墳や古墳祭祀の在り方を考えるうえで、重要な資料の1つとなる。 （杉木有紗）



復元した須恵器大甕（令和4（2022）年度出土）

古墳時代の竪穴建物跡から高坏が続々

正泉寺遺跡は、天竜川右岸を北西から南東に流れ下る、とそがわ土曾川の左岸に広がっている。令和6（2024）年4月から発掘調査を開始し、古墳時代中期から平安時代にわたる、竪穴建物跡70軒ほかの遺構を検出した。

SB4は、東西・南北とも5m弱、深さ20cm前後の竪穴建物跡である。東壁に壊された石芯カマドが残り、4基の柱穴と焼土跡がある。カマドの支脚石には底部と口縁部がない甕を被せ、高坏2点を添わせている。時期は5世紀中頃、飯田地方のカマド導入期である。カマドの反対側に当る西壁の手前から、復元できる状態の高坏10点と、坏・小型甕・壺・こしき甗各1～3点が集中して出土した。高坏は坏部と脚部の接合部で割れ、意図的な破壊の可能性はある。高坏が多数出土した古墳時代の竪穴建物跡は、飯田市内で数遺跡みつかっている。本遺跡の例は配置が明瞭で被熱の痕跡もあり、屋内で儀礼を行った後に火を放った状況が推測される。



（綿田弘実）

竪穴建物跡（SB4）西壁前 土器出土状況

私が群馬県の草津白根山麓、旧六合村にある「熊倉遺跡」を訪ねたのは20年程前の晩秋だった。標高約400mの麓の町からは望むことができない高地（標高約1100m）に立地する平安時代の集落遺跡である。遺跡が眠っている雑木林には、今なお埋まりきっていない竪穴建物跡が窪地となって残っている。熊倉周辺の高地にはこうした遺跡が散見される。標高が高く、水稲耕作が不向きな土地に存在する熊倉のような集落は「山棲み集落」として位置づけられていた（能登1985）。



草津白根山麓の熊倉遺跡（○印が熊倉遺跡）
六合村教育委員会（1984）『熊倉遺跡』掲載写真より

その後、南佐久郡の中部横断自動車道の調査で、尾根上や谷あいにある平安時代の遺跡の調査に関わったことがきっかけとなり、「山棲み集落」に興味を持つこととなった。それは、南佐久郡には横尾遺跡（川上村）や弥左衛門屋敷遺跡・雨堤遺跡（小海町）、木次原遺跡（北相木村）など、熊倉遺跡のように高地で水稲耕作に不向きな集落跡が点在することを知ったからである。

これらの集落は、他地域との交通・交流の要所に位置する点、鉄製品や灰釉陶器などを比較的多く出土する点が共通する。このことから、集落の住人は、馬を使って物資を運搬したと考えられる「倭馬」集団、あるいは農耕以外の生業（木地・炭焼き・鍛冶関係などの手工業）を営んでいた集団等ではなかったかという指摘がされている（桐原1968・1978）。

律令制下の佐久平には大規模集落が展開する。その一方で、南佐久郡には水稲耕作地を離れて高地に移動し、ムラを営む人々が出現する。これは、推測ではあるが、『賦役の厳しさから一部の人々が逃避し、浮浪・逃亡といった行動を起こしたものと』と解釈することができる。そしてこの動きは、次の時代（中世）への息吹のあらわれと捉えることができるのである。（藤原直人）

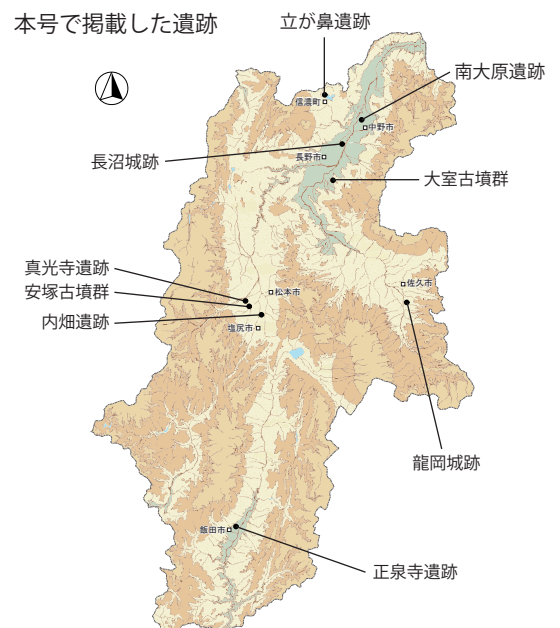
- 参考文献：桐原 健（1968）「平安期に見られる山地居住人の遺跡」『信濃』第20巻第4号
 桐原 健（1978）「信濃における倭馬の党の考古学的考察」『中部高地の考古学』
 能登 健 洞口正史 小島敦子（1985）「山棲み集落の出現とその背景」『信濃』第37巻第4号

編集後記

本号では県内の最新調査成果として、塩尻市の内畑遺跡や佐久市の史跡龍岡城跡など3遺跡を取り上げました。また、長らく発掘調査や保存整備をおこなっている立が鼻遺跡や大室古墳群については、その成果と今後の展望についてご執筆いただきました。立が鼻遺跡では今季も一般参加者を募った発掘調査が実施される予定で、新たな発見が期待されます。

ご多忙の中、ご寄稿いただいた皆様には感謝申し上げます。

（伊藤 愛）



（一財）長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター

〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田 963-4
 TEL 026-293-5926 FAX 026-293-8157
<https://naganomaibun.or.jp/> 印刷：有限会社アツサーロ